

# 愛媛果研ニュース

No.32 平成27年3月



産地化が進みつつある「甘平」

今年5月、病原性の強い新系統のキウイフルーツかいよう病（P s a 3系統）の発生が県内で確認されました。国内で初めての発生であり、病原菌の活動が弱まる夏までに685.6a、47園地で発生が確認されました。県では、病原菌の根絶を図り、日本一の産地を守るため、関係機関・団体はもとより農家の方々のご理解・ご協力もいただきながら、全伐採を含むできる限りの対策を講じ、感染拡大に努めてまいりました。

これまで経験のない病害の突然の発生でしたが、果樹研究センターでは、情報の収集、培ってきた知見の活用、他の研究機関との連携等により迅速に対応するとともに、現在は、国や他県の研究機関との共同研究により効果的な防除技術等の開発に取り組んでいるところです。

新しい技術の開発は、試験研究機関の最も大切な役割の一つです。高品質・安定生産、低コスト・省力・軽労働化、環境負荷の軽減等生産現場の抱える普遍的な課題を解決する技術はもとより、今回のような突発的な課題に対応できる技術の構築・開発は、産地間競争の激化や農家の高齢化が進む中、農業経営の安定、担い手の確保・育成のためにも、今まで以上に急がなくてはなりません。また研究成果もできるだけ早く現場移転する必要があります。

このような中で、今回は、①「愛媛県におけるキウイフルーツかいよう病（P a s 3系統）の発生」、②「甘平のマルチ栽培」、③「DNAマーカーによるカンキツ品種識別技術の開発」の三つの研究成果をご紹介します。

今年度、キウイフルーツは病害で、甘平は交配親で図らずも話題になりましたが、裏を返せば、それだけ注目されている果樹であるということもできます。

「禍を転じて福となす」という言葉があります。これまでの経験や技術、新しい研究成果を活かし、関係者が一丸となって今まで以上の産地にして行こうではありませんか。

果樹研究センター長 三木伸司